



一般財団法人

芹沢光治良記念文化財団

第 13 号:2026 年 05 月

ニュース (13)

『芹沢光治良生誕 130 年を迎えて』

代表理事 勝呂 奏

作家 (エクリヴァン) 芹沢光治良は、今年 2026 年の 5 月 4 日に生誕 130 年を迎えました。生まれは 1896 年、明治の半ばですから、以来大正、昭和、平成、令和と短くない時が流れています。逝去されたのは 1993 年で、没後も 33 年を数えています。それにも関わらず、芹沢がその人生を掛けて打ち込んだ文学は、今も読み継がれ、そこに現われた精神は多くの人を惹き付けています。それはどうしてだろうと考える時、いつも思い出すのは名作「死者との対話」冒頭の一節です。そこに芹沢の文学が、単に優れているからというのでない理由がありそうです。

それを確かめるために、次に「死者との対話」から引いておきます。戦争中に書斎を訪ねてくれた学生で、人間魚雷回天の訓練中に亡くなった和田稔に向けて語り掛けている言葉です。

死者は生きのこった人の記憶のなかにしか生存できないという。人の記憶は時とともにうすれて、やがて死者も生きのこった人の記憶に存在することが難しくなるであろうし、生きのこった人自身、この世を去ってしまう時が来るが、その時死者がこの世にかけた願望や精神はどうなるのであろうか。

これは人が生まれ、死ぬという命への根源的な問いを投げ掛けています。人の命は生きていた間だけの、儚いものなのかという痛切な思いです。芹沢は「死者との対話」の連作になる「秋扇」で、人の靈魂は不滅で、その人を知る心の中に残って不死であることを言っています。

こう書くなら、生誕 130 年、没後 33 年の芹沢の存在が、今もその文学を慕う人たちにとって不死であることを、すぐに理解されるでしょう。芹沢はその作品によって、読者の前に変わらない命を保っているのです。芹沢の晩年の《神シリーズ》には、天理教の教祖中山みきが存命の親様として登場します。それになぞらえるなら、存命の芹沢光治良として働いているのです。読者は作品を仲立ちにして、不死の芹沢と心を通わせた対話をしているのです。それをさせるところに、芹沢の文学の優れた特質はあるのです。

このようなことを考えているのですが、芹沢の生誕 130 年を前に、芹沢との素晴らしい対話をまとめた本が出版されました。藤澤全氏の『国際派・芹沢光治良一若き日の渡仏と文業のサムネール』（明治書院）と、大野一道氏の『わが青春の芹沢光治良』（吉田書店）の 2 冊です。藤澤氏のそれは「ブルジョア」での作家デビュー前の貴重な資料の発掘を元に、研究者らしい緻密でいて判り易い作品考証をしています。大野氏のそれは青年時代の芹沢との出会いの意味を、自らの人生に振り返る私小説で、読む者の胸に灯をともします。いずれも芹沢と深く心を通わせた得難い対話で、それを間近く聞かせて貰う幸運を思わずにはいられません。この機会に一読の機会をお持ちになれるようお勧めします。

■ 2025年を振り返って

- (1) 「芹沢光治良ノート⑤」発行 2025 年 05 月
「サムライの末裔」の紹介
- (2) 「財団ニュース(12)」発行 2025 年 12 月
- (3) 「狭き門より」 小学館より 再刊 2025 年 10 月
「狭き門より」 ポストカード発行
- (4) 「狭き門より」 再刊記念の会 2025 年 12 月

○朗読 「ある作家の秘密」(“狭き門より”に関するエッセイ)

・朗読者： 大窪 晶（おおくぼ あきら）

○「NHK スタジオ 102 インタビュー（昭和 51 年）」

・「狭き門より」紹介の映像。

※名古屋の“芹沢文学愛読者の会”安井正二様よりお借りしました。

・総勢 43 名の楽しい会となりました。

・「光治良先生の映像は、先生に直接お会いしたことの無い参加者にも好評で、79 歳のお元気な様子に感動していました。」

以上のように、映像を通して光治良先生の

『朗読者（大窪様）のお話』

「言葉をなぞるだけでは届かない、光治良先生の魂ともいえる『何か』を掴まなければならない。そんな光治良文学ならではの朗読の難しさを感じました」



- (5) 「芹沢家（光治良・文子・玲子）思い出を語る会」 2026 年 3 月

芹沢家（光治良・文子・玲子）を偲び、ゆかりの皆様とともに思い出を語り合う会を開催いたしました。当日は、写真・映像・音源を通して三人の歩みを振り返り、参加者の皆さまの心に静かな余韻が広がるひとときとなりました。

○「芹沢家」写真紹介

・家族写真 ・軽井沢の山荘の風景

・懐かしい音源

－ 文子さん：アヴェ・マリア歌唱

－ 玲子さん：大江光「森のバラード」ピアノ演奏



－ 光治良先生：「木との対話」「真夜中の修行」を語る音声

この約 15 分間、会場は深い静寂に包まれ、まるで三人が微笑んで皆様のお話を楽しんでいるような、静かで温かな時間となりました。

○「芹沢光治良」映像で紹介

「中野文学散歩 いつか見た街の作家・芹沢光治良」

(YouTube：旧中野区公式チャンネル (2014 年 09/18) より)

※懐かしい光治良先生、文子様、玲子様の姿やお話に、参加者は深い感慨をもって見入っていました。

○「参加者の思い出話」

・光治良先生、文子様、玲子様の懐かしい思い出話を 10 名の方にお話していただきました。三人がそっと寄り添い、皆さまのお話を楽しんでいるように感じられる、和やかで心温まる時間でした。

静かで温かな、心に残る会となりました。



■ 2026 年度の行事計画

「主な行事内容」

1. 芹沢光治良ノート(7)・財団ニュース(14)」の刊行、無料配布

芹沢光治良の魅力を幅広い世代の方々に知っていただくため、芹沢光治良ノート」および「財団ニュース」を刊行し、無料で配布します。これらの刊行物を通じて、芹沢文学への関心を高め、作品を後世へ確実に継承していきます。

2. 講演会・音楽会・朗読会の開催

(1) 活動内容

代表作『人間の運命』や『神シリーズ』を中心に、芹沢文学の精神を次世代へ伝えるため、講演会・読書会・朗読会を開催します。

(2) 活動時期

2026 年度は、以下の 3 回実施予定しています。

(・令和 8 年 5 月 ・令和 8 年 12 月 ・令和 9 年 3 月)

(3) 活動場所

・サロンマグノリアを中心に行う。

※ 2026 年 5 月 31 日(日) 芹沢光治良生誕 130 年記念

『わが青春の芹沢光治良—愛と死の文学』講演会(講演者 大野一道)



3. 芹沢光治良に関する資料の整理、保管、活用

(1) 資料のデータベース化

芹沢光治良の魅力を幅広い世代の方々に知っていただくため、「芹沢光治良ノート」および「財団ニュース」を刊行し、無料で配布します。
これらの刊行物を通じて、芹沢文学への関心を高め、作品を後世へ確実に継承していきます。

(2) 関係機関との連携

「沼津市芹沢光治良記念館」、「中野区図書館」、「全国“芹沢文学愛読者の会”」の皆様と協力し、芹沢文学を全国へ広める活動を進めます。

これらの取り組みを通じて、芹沢光治良の文学が持つ普遍的な魅力を、次世代へ確実に伝えてまいります。

「芹沢光治良ノート（6）の紹介

芹沢光治良の作品に、まだ出会っていない方々に向けて、芹沢作品をやさしく紹介する小さな冊子です。

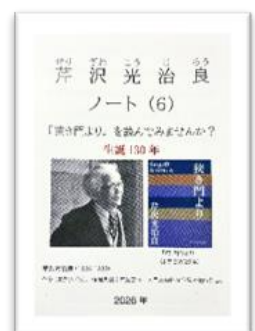
■『狭き門より』の紹介（2026年5月発行予定）

- ・光治良先生は、長い作家生活の中で三人の日本女性を描きました。
『愛と死の書』（夫に生きた若子）、『巴里の死す』（子に生きた伸子）、
そして『狭き門より』（自己に生きた美子）。
本作『狭き門より』は、他の二作とは異なり、明るく幸福な結末を迎える物語です。
- ・「自己に生きる者は、境遇がどうであれ幸福である」
芹沢文学の核心触れる一冊として多くの方に読んでいただきたい作品です。
※「狭き門より」の冊子を、身近な知人、友人にぜひお伝えください。

「芹沢光治良ノート シリーズ」

- ① 芹沢光治良ノート（1）『完全版 人間の運命・父と子』
- ② 芹沢光治良ノート（2）『巴里に死す』
- ③ 芹沢光治良ノート（3）『孤絶』
- ④ 芹沢光治良ノート（4）『ブルジョア』
- ⑤ 芹沢光治良ノート（5）『サムライの末裔』
- ⑥ 芹沢光治良ノート（6）『狭き門より』

※これらのノートは、財団ホームページ「芹沢文学ガイドとライブラリー」に掲載しています。どうぞご覧ください。



“芹沢文学のまわりで シリーズ（７）”

野見山恵美子 芹沢光治良記念会（学芸・作品資料）担当

■二つのアラン像 [高田博厚 1932 年作 ブロンズ]

東中野のサロン・マグノリアには、フランスの哲学者アランのブロンズ像【写真1】がある。これは首までの頭像である。一方、1997 年世田谷文学館「芹沢光治良展」図録 61 ページの資料「夏の日」【写真2】の机上の像とは、形態が異なっていることが、かねてより気になっていた。こちらの方は、この胸像【写真3】であろう。

「夏の日」:「文芸」昭和 14(1939)年 10 月号掲載(抜粋)

く机の前には、アランの胸像がある。アランは怖ろしそうな表情のなかに、暖かなものを湛えて、じっとこちらを凝視している。パリでお会いした日から、年をとらずに、いつも話しかけてゐるやうである。この胸像があつて怖いからといって、小さい子供が書斎にはいって来ないのも助かる。
>

これらの像の制作者は、彫刻家の高田博厚(彫刻家。文筆・思索・翻訳家。1931 年から 1957 年フランス滞在)である。留学時期は重なっていないが、1951 年の芹沢の欧州訪問の時に二人はパリで会っている。

アランのブロンズ像が芹沢の元に来た時の経緯、エピソードとして『神の計画(はからい)』第一章には、次のように記されている。(作中では 1931 年『明日を逐うて』の新聞連載が終わろうとしている時期という設定。)

く一高の寮で同室だった工学部の旧友の M が、友人の妹だという夫人を伴って、訪ねて来た。その夫人の夫は詩人で彫刻家である高田博厚であるが、何年もフランスに留学していて、夫人は経済的にどん底生活にたえていたところ、最近主人から自作の彫刻が数点届いたので、それを金にしようと努力しているが、不景気のために、買い手がなくて困っているので、助けると思って僕に買ってもらおうと、一点持参したと説明>した。

く堂々たる人物の胸像で、フランス人らしい。僕には誰かわからなかった。

「高田が尊敬しているアラン先生の肖像で、主人は最も自信ある作品だと申しますが、先生にご満足いただけるかと思って持参しました—」と、夫人は静かに話した。

「ああ、アランでしたか」と、僕は思わず声をあげて、ブロンズ像に近づき、万感の想いで、その頭部を両掌でなでた。>

アランの塑像製作は 1932 年。2 月にル・ヴェジネにアランを家に訪ね、制作を始める。その時の様子や、アラン、マルセル・マルチネ、ロマン・ロラン、ガンジー、ルオー(いずれも塑像を制作している)などとの親交については『分水嶺』(1975, 岩波書店)や他多数の高田の著作に詳しい。

くパリに行って、三、四年目かに、日本に帰る野見山温(第一回フランス政府給費留学生の一人、九州帝大法科出身)に託して、十点ばかりを送り、国展(1935 年の国画会第十回展)に特品され

た。>とのこと。それらの日本行きの作品の中には、この時期の満足の行く作品と自身が評していたアラン像も含まれていたであろう。

さて、二つのアラン像の「謎」については、高田からの芹沢宛書簡により、先日その経緯を知ることとなった。芹沢の最初のアラン胸像は戦火で失われてしまっていた。現在サロン・マグノリアにある頭像は、1966年（鎌倉にアトリエと住居を構えた年）に、新たに鑄金したものであり、それはく以前の胸のついたものより、ずっと効果がある作品であり、高田はぜひ芹沢にこのアラン頭像を所有してもらいたいと望んだのだ。

二つのアラン像【写真4】と【写真5】を比較すると、アランの顔や頭部は同一の塑像原型であり、基本的には胸の部分があるかないかの違いであることがわかる。細部の表現や形体の輪郭、稜線のシャープさには、30年を経ての作家の意識や造形感覚の違いが見られる。また鑄造時の違いがあるにしても、制作年が同一なのは、鑄造する前の塑像原型が同一、もしくは日本に持ってくる際の原型（粘土による塑像を元にしてつくる鑄造のための原型。石膏などによる）が同じであるからだ。

胸像の方は、東松市・高坂彫刻プロムナードにて、目にすることも触ることもできる。
また、福井市美術館には両方のブロンズ像が所蔵、常設展示されている。

『分水嶺』には一か所、1951年のパリでの芹沢についてごくごく短く書かれている。（不破久温氏にご教示いただいた。）また『形と美のために』（1978、求龍堂）にも暗に芹沢の小説のことと思われる個所を見つけた。アラン像やこの哲学者の思想を介してではなく、直接の二人の交流はどうであったのか、また互いについてはどのように思っていたのかなど関心は広がる。



【写真1】



【写真2】



【写真3】



【写真4】



【写真5】

入手可能な「電子書籍一覧」の紹介

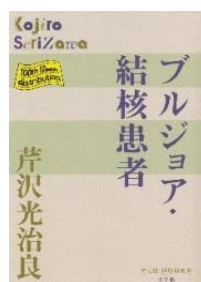
「小学館」



『狭き門より』



『サムライの末裔』



『ブルジョア・結核患者』



『孤絶』

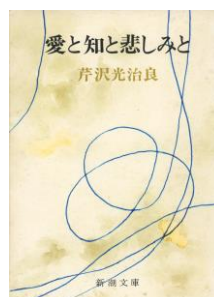
「新潮社」



『神の微笑』



『愛と死の書』

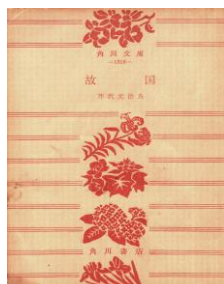


『愛と知と悲しみと』

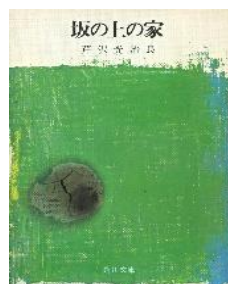
「角川 e 文庫」



『離愁』



『故国』



『坂の上の家』



『春の谷間』

※「芹沢光治良の電子書籍一覧」(BOOK☆WARKER) が掲載されている『QR コード』。



財団寄贈・芹沢光治良に関する図書の紹介

○『わが青春の芹沢光治良 ―愛と死の文学』

(吉田書店) 大野一道 (財団会員)

【目次】

第一部 出合いまで

・母の入院 ・天理教、神尾先生 ・芹沢先生のもとへ

第二部 わが青春の芹沢作品

- 1 『秘蹟』 2 『孤絶』 3 『離愁』 4 『巴里に死す』
5 『愛と死の書』 6 『一つの世界——サムライの末裔』



○『102歳、マリアと文学と『易経』と』 (青弓社) 梶川敦子

「紹介」

焼け跡の陋屋に仙居する易者を描く長篇小説、師事した芹沢光治良の文学を読み解く論集と芹沢に捧げる自伝的長篇小説、さらには『易経』を精読した講義を出版してきた敬虔なキリスト者が、戦前―戦中―戦後の102年を生き抜いた軌跡を生き生きと描く自叙伝。



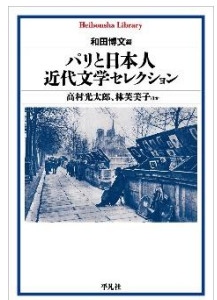
○『パリと日本人 近代文学セレクション』(平凡社)

【目次】

：

第2章 ツーリズムの時代、リベリテ・エガリテという幻想 一九二〇年代～三〇年代前半のパリと日本人

・ **巴里の懺悔** 芹沢光治良 ・ ・ 等



■現在入手困難な「神シリーズ8作品」を1セットに収めた

「**神と人間**」をネットで購入できます。

ぜひこの機会にお手に取っていただければ幸いです。

(「神と人間(全8冊)」¥15,400)



『編集後記』

本号では、一年間の活動と来年度の計画をまとめました。振り返るほどに、皆さまのご支援のありがたさを深く感じております。

電子書籍も併せてご覧いただければ幸いです。次号もどうぞよろしくお願いいたします。

※お知り合いの方にも会員になっていただくようお勧めください。

(会費無料です。財団ホームページより登録できます。)

発行： 一般財団法人 芹沢光治良記念文化財団

〒164-0003 東京都中野区東中野5-8-3

事務局 池田 三省

メール: serizawa.52@nifty.com

財団ホームページ

URL: <http://serizawa-kojiro.com>